

# 日本動物考古学会 第11回大会 プログラム・抄録集



有珠モシリ遺跡18号墓（縄文晩期の多数合葬・複葬例）

日時：2024年7月6日（土）・7日（日）

場所：東北芸術工科大学 山形キャンパス

主催：日本動物考古学会

共催：東北芸術工科大学歴史遺産学科

協力：（一財）山形コンベンションビューロー



**日本動物考古学会**  
JAPANESE SOCIETY FOR ZOOARCHAEOLOGY

## 目 次

|                  |       |
|------------------|-------|
| 大会組織委員会名簿        | 1     |
| 大会スケジュール         | 1     |
| 会場のご案内           | 2     |
| 会場案内図            | 3     |
| 発表者の方へ           | 4     |
| 研究発表プログラム        | 5-7   |
| 抄録               |       |
| 口頭発表抄録           |       |
| 研究発表A            | 9-13  |
| 研究発表B            | 14-16 |
| 研究発表C            | 17-19 |
| 研究発表D            | 20-23 |
| 研究発表E            | 24-29 |
| ポスター発表抄録         | 30-45 |
| 『動物考古学』原稿募集のお知らせ | 46    |

# 大会組織委員会

## 会長

佐藤孝雄（慶應義塾大学）

## 大会事務局

青野友哉（東北芸術工科大学）

石丸恵利子（広島大学総合博物館）

植月 学（帝京大学文化財研究所）

江田真毅（北海道大学総合博物館）

小島秀彰（若狭町歴史文化課）

澤浦亮平（沖縄県立博物館・美術館）

本郷一美（総合研究大学院大学）

山崎 健（奈良文化財研究所）

山根洋子（港区立郷土歴史館）

# 大会スケジュール

7月6日（土）

|             |         |
|-------------|---------|
| 12:00～      | 会場・受付   |
| 12:45～12:50 | 開会の辞    |
| 12:50～14:30 | 研究発表A   |
| 14:30～15:15 | ポスター発表  |
| 15:20～16:20 | 研究発表B   |
| 16:20～16:25 | 休憩      |
| 16:25～17:25 | 研究発表C   |
| 17:25～17:30 | 記念撮影    |
| 17:30～18:10 | 総会      |
| 18:20～18:40 | 貸切バスで移動 |
| 19:00～21:00 | 懇親会     |

7月7日（日）

|             |       |
|-------------|-------|
| 8:30～       | 開場    |
| 8:50～10:10  | 研究発表D |
| 10:10～10:15 | 休憩    |
| 10:15～11:15 | 研究発表E |
| 11:15～11:20 | 休憩    |
| 11:20～12:20 | 研究発表F |
| 12:20       | 閉会の辞  |

※ 懇親会は事前申込者のみ

## 会場のご案内

### 東北芸術工科大学 山形キャンパス

〒990-9530 山形県山形市上桜田 3 丁目 4－5

<https://www.tuad.ac.jp/>

### 交通アクセス

JR山形駅東口バスプール5番乗り場から「東北芸術工科大学前ゆき」約20分

駐車場は本館周辺にありますので、自家用車・レンタカーでお越しの方はご利用ください（無料）。

会場までの公共交通機関は路線バスに限られ、会期中は本数も非常に少ないのでご注意ください。

参加者同士でお誘いあわせの上、タクシーの乗り合わせ等もご検討ください（片道1,800円前後）。タクシー乗り場は山形駅東口にあります。

<参考：大学近くのタクシー会社> 平成タクシー 023-615-1313

#### 【山形駅前 → 東北芸術工科大学（土日祝）のバス時刻表】

|         |      |       |       |       |       |
|---------|------|-------|-------|-------|-------|
| 山形駅 5 番 | 8:18 | 9:43  | 12:03 | 15:58 | 16:58 |
| 芸術工科大学前 | 8:36 | 10:01 | 12:21 | 16:16 | 17:16 |

①

②

#### 【東北芸術工科大学 → 山形駅前（土日祝）のバス時刻表】

|          |       |       |       |
|----------|-------|-------|-------|
| 芸術工科大学前  | 12:40 | 16:35 | 17:35 |
| 山形駅前 5 番 | 12:58 | 16:53 | 17:53 |

③

① 2 日目（7 月 7 日）の開会に間に合う便

② 1 日目（7 月 6 日）の開会に間に合う便

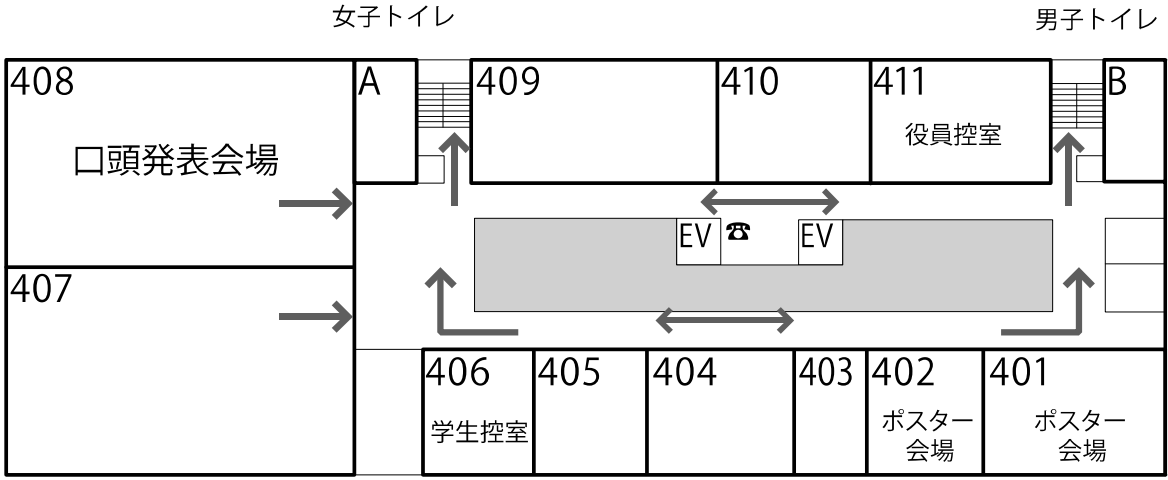
③ 2 日目（7 月 7 日）の閉会直後の便



# 会場案内図



## 本館4階（大会会場）



- ・ 昼食は1日目のみ学食が利用可能です
  - ・ 会場内での飲食は可能ですが、飲料の自動販売機があるのみです
  - ・ 宿泊施設については各自で手配をお願いします（繁華街は山形駅東口です）
- 会期中ポスター会場（401教室）で有珠モシリ遺跡の遺物・人骨の展示が見学できます

# 発表者の方へ

## 1. 口頭発表

### ・ 発表データの受け渡しと使用機材

発表者は、ギガファイル便 (<https://gigafile.nu/>) 等のファイル転送サービスを利用の上、7月5日（金）17時までに、本大会事務局 東北芸術工科大学 青野友哉研究室 (aono.tomoya@aga.tuad.ac.jp) までPowerPointのデータをお送り下さい。タイトなタイムスケジュールの中で円滑に大会を運営するための方法としてご理解とご協力のほどお願い致します。発表には会場に設置されたPCをご使用ください。自前のPCを使用することはお控え下さいますようお願いいたします。

Microsoft PowerPoint 2016がインストールされたWindowsのPCを使用する予定です。Macで発表データを作成される方は、事前に各自で発表データがMicrosoft PowerPoint 2016で作動するか動作確認を行ってください。

### ・ 発表時間

1件当たり20分です。内訳は発表時間15分、質疑応答5分とお考えください。13分経過（ベル1回）、15分経過（ベル2回）、20分経過（ベル3回）をお知らせします。大会を円滑に運営できるよう、時間の厳守にご協力をお願いいたします。

## 2. ポスター発表

ポスターボードのサイズは横90cm、縦180cmです。会場には掲示用の画鋏等を用意しますので、ご自身の演題番号が記されているボードに掲示をお願いします。ポスター掲示は7月6日（土）12:00から可能です。発表時間は7月6日（土）の14:30～15:15です。発表者は、この時間にポスター設置場所でご発表下さい。また、7月7日（日）12:30までに各自でポスターを撤収してください。

# 研究発表プログラム

7月6日(土)

開場・受付 12:00～

開会の辞 12:45 (会長：佐藤孝雄)

研究発表A (座長：松崎哲也)

12:50～13:10 **A01** 山形県高島町日向洞穴出土動物遺存体の帰属時期の再検討 (予報)  
納屋内高史・澤田純明・米田 穰・渋谷孝雄

13:10～13:30 **A02** 大分県川原田洞穴の再検討  
遠部 慎・畑山智史

13:30～13:50 **A03** 東北地方における縄文時代の動物形土製品の内部構造の地域差  
鹿又喜隆・鹿野晴尚

13:50～14:10 **A04** 縄文時代、サルの土偶はなぜ口を尖らせているのか？  
三戸幸久

14:10～14:30 **A05** 歯牙製垂飾からみた加工/素材の関係性  
川添和暁

14:30～15:15 **ポスター発表** (発表者・題目は p.7) ・有珠モシリ遺跡出土資料見学

研究発表B (座長：荘司一步)

15:20～15:40 **B01** 貝殻に刻まれた縄文時代早期の災害史  
畑山智史

15:40～16:00 **B02** 東京湾西岸における縄文時代中期から後期の鯨類利用  
浪形早季子

16:00～16:20 **B03** 先史時代の煮炊きと土器残存有機物との関係  
宮田佳樹・村本周三・福井淳一・宮内信雄・堀内晶子・  
小澤仁嗣・国木田大

— 5 分休憩 —

研究発表C (座長：菅原弘樹)

16:25～16:45 **C01** 遺跡調査における動物資源利用評価の実践  
福井淳一・澤田純明・宮田佳樹・小畑弘己

16:45～17:05 **C02** 有珠モシリ遺跡の動物遺存体同定  
— 北海道における縄文晩期貝層の分析 —  
三谷智広・青野友哉・中村賢太郎・永谷幸人

17:05～17:25 **C03** 北海道アイヌの熊送り儀礼にみる近世以降の様式変化  
佐藤孝雄・加藤博文・大坂 拓・折井美陽

記念撮影

17:30～18:10 **総会**

貸切バスでの移動 18:20～18:40 **懇親会** 19:00～21:00

## 7月7日(日)

開場 8:30～

研究発表D (座長：菊地大樹)

- 8:50～9:10     **D01 古墳時代の海浜集落にみる動物利用**  
—大阪府南部の小島東遺跡における動物遺存体の分析を通じて—  
山田望海・藤田道子・丸山真史
- 9:10～9:30     **D02 炭素・窒素安定同位体分析による遺跡出土貝類の産地推定の試み**  
石丸恵利子・大西雄二・由水千景・陀安一郎
- 9:30～9:50     **D03 北海道のサケ、マス類 (*Oncorhynchus* spp.) 遺存体を対象にした  
古代DNA分析による人と魚の歴史生態学研究**  
七座有香・福井淳一・Hua Zhang・Thomas Royle・Dongya Yang
- 9:50～10:10    **D04 古代DNAから明らかになった縄文時代のオオヤマネコ**  
寺井洋平・松本悠貴・増田隆一・佐藤孝雄

— 5 分休憩 —

研究発表E (座長：丸山真史)

- 10:15～10:35   **E01 奈良文化財研究所所蔵のリュウキュウイノシシ下顎骨標本  
(花井コレクション)**  
山崎 健・坂本 匠・松崎哲也
- 10:35～10:55   **E02 現生飼育イノシシの口腔病理に関する調査結果について**  
山崎京美・黒沢弥悦・仲谷 淳・清水良央・澤浦亮平・遠藤秀紀
- 10:55～11:15   **E03 韓半島の湖南地域における鉄器時代のブタ**  
裴亨坤

— 5 分休憩 —

研究発表F (座長：澤田純明)

- 11:20～11:40   **F01 韓国におけるニワトリの普及に関する基礎的研究**  
—キジ科およびニワトリの出土遺跡の分布と時期的変遷—  
李河暻・丸山真史・江田真毅
- 11:40～12:00   **F02 江戸時代のニワトリの大きさの多様性**  
許開軒・丸山真史・江田真毅
- 12:00～12:20   **F03 弥生時代のニワトリの継代飼育を探る**  
—カラカミ遺跡資料の分析から—  
江田真毅・泉洋江・松見裕二

閉会の辞 12:20 (副会長：本郷一美)



## **ポスター発表**

**P01 山形県遊佐町小山崎遺跡出土動物遺存体の空間的分析**

納屋内高史

**P02 宮城県東松島市里浜貝塚で初確認されたウシサワラについて**

松崎哲也

**P03 北陸地域における初期貝塚の出現年代**

畑山智史・遠部 慎

**P04 新潟県のウマ遺存体出土遺跡**

高尾将矢

**P05 近世下総ウマ集団の特徴**

植月 学・櫻庭陸央・山本満梨奈・宮川博司

**P06 尾張藩鷹場に所在する旧家から発見されたツルの骨**

—東京都立川市中野家の事例—

阿部常樹・高野宏峰・鳥越多工摩・山下祐香理

**P07 近代・大学校地内より出土した大量の動物骨**

—東京大学本郷構内の遺跡の事例—

阿部常樹・高橋怜土・堀内秀樹

**P08 三浦市間口A洞窟の脊椎動物遺体**

宇根宏紀

**P09 3D写真計測による骨角器の検討**

—縄文時代後期における角座骨付き鹿角の利用について—

風間智裕・畑山智史・福井淳一・宮田佳樹

**P10 破碎からみた縄文後期関東地方における動物解体技術**

櫻庭陸央・植月 学

**P11 愛知県朝日貝殻山貝塚より1954年の調査で出土した弥生時代前期の動物遺存体**

廣瀬允人

**P12 琵琶湖に運ばれてきた海産物—滋賀県塩津港遺跡—**

佐藤巧庸・重田 勉

**P13 動物頭骨を用いた民族資料**

—南山大学人類学博物館所蔵西江コレクションより—

高橋佳子

**P14 次世代シーケンサー解析によるマルタニシの遺伝子情報から**

ヒトの移住を読む 第一報

松本建速

**P15 Origin and Spread of *Bombyx mori* domestication in East Asia**

Dong Hoon Shin・Yangsu Yi・Jong Ha Hong・Ala Go

# 口頭発表抄録

## 研究発表A

7月6日（土） 12:50～13:10

## 研究発表B

7月6日（土） 15:20～16:20

## 研究発表C

7月6日（土） 16:25～17:25

## 研究発表D

7月7日（日） 8:50～10:10

## 研究発表E

7月7日（日） 10:15～11:15

## 研究発表F

7月7日（日） 11:20～12:20

## 山形県高畠町日向洞穴出土動物遺存体の帰属時期の再検討（予報）

Re-examination of stage date of faunal remains excavated from Hinata Cave,  
Takahata Town, Yamagata Prefecture (introductory investigation)

○納屋内高史（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）・  
澤田純明（新潟医療福祉大学）・米田 穰（東京大学総合研究博物館）・  
渋谷孝雄（山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館）

Takashi NAYAUCHI, Junmei SAWADA, Minoru YONEDA, Takao SHIBUYA

日向洞窟は山形県高畠町に所在する洞穴遺跡で、縄文時代草創期の資料を出土した遺跡として学史的にも著名である。動物遺存体も良好な状態で多く出土しており、日向洞窟を調査した加藤稔は、これらが草創期に由来する可能性に言及した。しかし、出土層位等の記録が残っておらず、考古学的な観点から詳細な年代を推定することは困難である。

その為、動物遺存体のAMSによる14C年代の測定を行い、帰属時期の推定を試みた。その結果、縄文時代草創期、早期、前期、後期など複数の時期のものが含まれていることが明らかとなった。この所見は、日向洞窟から出土している土器等の遺物の年代観とも整合的である。縄文時代草創期の動物骨資料は全国的にも少なく、特に東北地方においては皆無といってよい。今回報告した結果は、日向洞窟出土動物骨に縄文草創期の良好な資料が含まれていたことを示した点において、重要な意義を持つものである。

日向洞窟出土の動物遺存体は、1000点以上にのぼり、多数資料の帰属時期をどのように推定するのが今後の課題である。これに関し、AMS法を軸に、フッ素分析に基づく迅速・安価な相対年代評価を組み合わせることで、できるだけ多くの動物遺存体について年代を評価することを計画している。今後、その結果を踏まえ日向洞窟の時期別の動物相と動物利用を明らかにしてゆきたいと考えている。

研究発表A02  
7月6日(土)  
13:10～13:30

## 大分県川原田洞穴の再検討

○遠部 慎(中央大学人文科学研究所)・畑山智史(飛ノ台史跡公園博物館)

Shin ONBE, Satoshi HATAKEYAMA

分県杵築市川原田岩陰遺跡は、1963年と1997年の発掘調査が行われた岩陰遺跡である。縄文時代早期から後期までのまとまった土器群が検出されている。動物遺存体は後期以降の層位から検出されている。

2次にわたる調査試料100点について同定をおこなった結果、みられた貝種は、1門2綱3目5科7属7種である。確認できた貝種の棲息域は、淡水棲、汽水棲、海水棲と多様な環境であり、人類による採取活動によって遺跡にもたらされたことが確認された。

川原田岩陰の所在する杵築市内では、縄文中～後期の龍頭遺跡や、後期前半の山迫貝塚などがあり、今後それらとの関係や、年代測定などを実施していくことで資料群の年代的整理などを行い、本遺跡の資料群の実態を整理していきたい。

## 東北地方における縄文時代の動物形土製品の内部構造の地域差

Regional differences in the internal structure of animal-shaped clay products  
from the Jomon period in Tohoku region

○鹿又喜隆・鹿納晴尚（東北大学）

Yoshitaka KANOMATA, Harumasa KANO

宮城県石巻市沼津貝塚と青森県弘前市十腰内遺跡出土資料9点を対象に、X線CTによる動物形土製品の内部構造の解析を実施し、本学会誌に報告した（鹿又他2024）。分析の結果、土製品内に動物儀礼を示す可能性のある、物体とそれに通じる孔が存在し、動物形土製品が靈魂を宿す依代として機能した可能性が窺えた。さらに、刺突を狩猟儀礼、その穴の修復を再生儀礼と捉えれば、縄文時代の動物儀礼を具体的に復元することが可能となった。しかし、対象資料は十腰内遺跡の1点を除き、全て沼津貝塚出土品であったことから、このような動物儀礼が沼津貝塚に限定されるものか、それとも広く共有されるものかを明らかにすることが大きな課題として残された。本研究では、新たに宮城県仙台市王ノ壇遺跡、大野田遺跡、山口遺跡、岩手県一関市中神遺跡の出土資料10点を対象に加え、X線CTによる内部構造の分析対象を実施した。対象遺跡の所在地を拡大することで、動物儀礼の地域性を検討できるという見通しのもとに分析した結果、仙台市内の遺跡群や中神遺跡では沼津貝塚とは明らかに異なる動物形土製品の製作法があり、沼津貝塚で認められたような動物儀礼の痕跡は僅かであったが、一部に共通する要素も認められた。

## 縄文時代、サルの土偶はなぜ口を尖らせているのか？

○三戸幸久

Yukihisa MITO

縄文時代、ニホンザル (*Macaca fuscata fuscata*) の土偶は(2023年現在) 9点出土している。その多くのが、口を尖らせた表情を持っている。この表情は、後世のサルの絵や人形にはほとんど見られない。

この縄文時代のサル型土製品に見られる特徴的な表情は、現世のニホンザルでは、はぐれた子ザルが、母ザルや群れの仲間を呼ぶとき声を発するときの表情に酷似している。

土偶の作り手は主に女性と考えられ、飼われている子ザルが集落内で、注目を集めており、作り手はその事情を理解して作成していたと思われる。そして、当時の関東～東北地方の人々の間でサルというもののイメージが口を尖らせた顔のけものとして定着していたことなどが想像できる。

この特徴的な表情を繊細に表現した土偶を作ることができたのは、当時の高い土器制作技術があっただけでなく、子ザルを集落で飼っていた可能性が高く、子ザルと飼い主との間には精神的絆ができていたと思われる。こうした特定の表情をしたサルの土偶のありようから、縄文時代の、飼われていた子ザルを通じて、他種への共感・共鳴が見て取れ、当時の動物観、サル観が深く、豊かであり、それを許容し慈しむなど、他者への愛情を育む社会はかなり高度で豊かな自然観、世界観をもった精神文化があったと考えられる。

## 歯牙製垂飾からみた加工/素材の関係性

Processing/material relationship from the perspective of tooth accessories

○川添和暁（愛知県埋蔵文化財センター）

Kazuaki KAWAZOE

骨角製装身具の中でも、歯牙製品は主要な資料群であり、多くは穿孔が施され、いわゆる垂飾（玉類）と言われる器種などに分類されるものが多い。実際には出土状況との比較対照により、頭飾り・耳飾り・指輪・腕輪・胸飾り・腰飾り・足輪など、さまざまな用途に機能していることが知られている。一方、製品に対する加工との関係性でみると、①素材自体の形状をほぼそのまま残して使用されている器種、②素材を輪切り状に分割して製作されている器種、③さらに半截や細片化させた素材から製作されている器種が認められ、時期・地域によってその様相に特色のあるものも見られる。本発表では、特に縄文時代および弥生時代の資料の中でも、イノシシ牙製品に加え、イヌ科・オオカミ・クマ科などの主に陸棲獣由来素材について取り上げて、その様相についてそれぞれ確認した。今回、牙製垂飾をはじめとする装身具類を大きな資料群として捉え、稀少・一般、多加飾・少加飾という観点で、素材と製品の関係性を捉え直す作業をおこなった。これらの製作・使用状況および保有の状況を見ると、特定時期・地域では遺跡（集落）単位で、さまざまな特徴的な様相を確認することができた。この状況が、集団の象徴性の表出によると考えることができるのであれば、地域社会の様相および変化を考える一指標として有効であるとの見通しを立てることができた。

研究発表B01  
7月6日(土)  
15:20～15:40

## 貝殻に刻まれた縄文時代早期の災害史

Disaster archeology using the shell growth line in the initial Jomon period

○畑山智史(船橋市飛ノ台史跡公園博物館)

Satoshi HATAKEYAMAYA

ハマグリなどの二枚貝の表面に刻まれる成長線は、日周期的に形成される日輪として知られている。日本考古学では、その生物学的特性を利用することで、遺跡における人類の貝採取季節や遺跡の堆積速度などが推定されてきた。この成長線は、日輪以外にもその貝類が棲息していた環境の変化を反映する。例えば、先の2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震によって生じた津波を起因とする明瞭な障害輪が福島県のアサリで報告されている。そこで第1回日本動物考古学会では、災害史復元の新たな方法の開発を目的として、房総半島で採取したチョウセンハマグリやコタマガイの貝殻切断面にみられる微細構造を観察した。その結果、これらの貝殻においても同様の障害輪が確認され、貝殻成長線を用いた災害史復元の可能性を報告し、貝殻表面にみられる微細な変化等に注目して、過去の資料の再検討の必要性を提示した。今回、過去の資料として、飛ノ台貝塚第1・2次調査の再検討した結果、縄文時代早期後葉の野島式期新段階の貝塚より得られたハマグリの貝殻表面に明瞭な障害輪が観察された。そこで本発表では、観察できた障害輪について縄文時代早期の津波の可能性も視野に検討し、貝殻成長線に基づく災害史の復元について示したい。



## 東京湾西岸における縄文時代中期から後期の鯨類利用

○浪形早季子（（公財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター）

Sakiko NAMIGATA

東京湾内では縄文時代早期より鯨類の骨や歯が出土し、特に縄文時代中後期からは出土事例が増加し、称名寺貝塚などに代表されるように、鯨類利用に比重が置かれる時期もみられる。縄文時代後期においては銚などの骨角製品も豊富に出土し、積極的な鯨類の利用が想定されている。

鯨類で最も多く出土するのは椎骨であり、その他、歯の出土も多くみられるが、これらはサイズの違いこそあるが、種同定は難しい。本研究では、これらの古DNA分析を行うことによって種を判明させ、生息域などの違いを見出した。またこれにより捕獲方法の違いも想定され、従来漠然と湾口部ないしは湾外での銚猟や追い込み漁と考えられてきた捕獲に関しても、より沿岸域での捕獲が想定された。

またこれまで縄文時代後期初頭の称名寺式期などの後期に入ってから活発な鯨類利用が議論されてきたが、中期初頭五領ヶ台式期の元町貝塚をはじめ、すでに中期より狩猟具も含めた海生動物捕獲に備えた下準備が行われていたことが元町貝塚の資料によって判明した。海生動物の種及び狩猟方法の違いを時系列で示す。

## 先史時代の煮炊きと土器残存有機物との関係

The relationship between prehistoric cooking practices  
and the chemical composition of organic residues in pottery

○宮田佳樹（東京大学）・村本周三（北海道教育庁）・  
福井淳一（北海道埋蔵文化財センター）・宮内信雄・小澤仁嗣（東京大学）・  
堀内晶子（国際基督教大学）・國木田大（北海道大学）

Yoshiki MIYATA, Shuzo MURAMOTO,  
Junichi FUKUI, Nobuo MIYAUCHI, Hitoshi OZAWA,  
Akiko HORIUCHI, Dai KUNIKIDA

土器で煮炊きを行うと、土器の内面の表層には調理した食材に起因する残渣が付着して、場合によっては、炭化し（“コゲ”）、土器の胎土には脂質が浸透して、吸着する。土器の外面の表層には、燃料材から生じた微細な炭素粒が付着・積層した“スス”と調理内容物が“吹きこぼれ”て炭化し、付着する。

この有機物の化学組成（脂質量、化学組成、バルクの炭素・窒素同位体組成、及び、分子レベル炭素同位体組成など）から、実際に何を煮炊きしていたのかを具体的に考えることができるようになり、調理内容物（マクロな視点）の研究は盛んに行われている。しかし、それらの有機物がどのようなプロセス（ミクロな視点）で、土器に残存するのかは、完全には理解されていない。

本研究では、土器使用痕観察結果に基づき、土器残存脂質分析結果を解析して、先史時代の土器による調理と土器残存有機物との関係やその整合性について考える。今後、調理形態なども含めて、考古学コンテキストが高くないと想定される土器片からの離散的な科学分析値を用いて、先史時代の煮炊きを具体的に解釈していく上では、重要な視座となるであろう。

## 遺跡調査における動物資源利用評価の実践

Practice of Animal Resource Utilization Assessment in Archaeological Site Surveys

○福井淳一（（公財）北海道埋蔵文化財センター）・  
澤田純明（新潟医療福祉大学）・宮田佳樹（東京大学総合研究博物館）・  
小畑弘己（熊本大学）

Junichi FUKUI, Junmei SAWADA, Yoshiki MIYATA, Hiroki OBATA

一般的な乾燥地遺跡を調査する場合に、遺構や土器・石器に留まらず、積極的に動物資源利用を評価していこうとするには、焼骨をより多く回収し、比較することが重要であることは、既に多くの指摘がある。

良好な動物遺存体が残されていない遺跡の「緊急発掘調査」に従事することがほとんどである筆者の取り組みとしては、①かろうじて残る動物遺存体の検出・分類・同定以外に、②動物遺存体が出土する状況：盛土遺構の検討、③貝塚における焼骨率の検討、④遺跡から足跡を見出し、石器とともに狩猟法を検討、⑤非破壊的組織形態観察による骨片の種同定・骨角器の素材同定の根拠検討、⑥土器残存有機物分析を行い、蓄積していくことで、遺存体だけでは評価しきれない資源利用の変遷、ひいては環境変動の影響の程度の検討、⑦土器圧痕から動物遺存体痕跡を見出し利用を検討、⑧遺跡と同一地域における民俗事例の収集と応用、⑨遺跡と同一地域における動物や植物、地形、水文環境などの観察と応用、などを行い各遺跡の発掘調査報告書に反映してきた。

また、報告では遺跡、遺構、遺物などとの相互の関わりに注意し、地域全体の中で評価するよう心がけた。さらには矛盾なく実態へ接近するために全時代を検討することで、脈絡の中で動物資源利用の評価を試みた。

発表では、これまで取り組んできた事例を報告し、課題を議論するものである。

## 有珠モシリ遺跡の動物遺存体同定 —北海道における縄文晩期貝層の分析—

Identification of Animal Remains at the Usumoshiri Site :  
Analysis of Final Jomon shell mounds in Hokkaido, Japan

○三谷智広(株式会社パレオ・ラボ/同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター)・  
青野友哉(東北芸術工科大学)・中村賢太郎(株式会社パレオ・ラボ)・  
永谷幸人(伊達市噴火湾文化研究所)

Tomohiro MITANI, Tomoya AONO, Kentaro NAKAMURA, Yukihiro NAGAYA

北海道伊達市有珠モシリ遺跡は、縄文晩期～続縄文前半期の遺跡である。2023年度の調査では、例数の少ない縄文晩期の貝層を検出した。14C年代測定 of 海域差( $\Delta R$ )の算出に必要な試料を得ること、また当時の生業活動を明らかにするためにブロックサンプルを採取し、現在動物遺存体の同定を行った。

ブロックサンプルは、「晩期A」(40cm×40cm、深さ30cm)と「晩期B」(30cm×15cm、深さ20cm)を設定し、人工層位で分けて回収した。回収した試料は、5mm・3mm・1mm・0.5mmのフルイで水洗選別を行い、同定可能な部位を抽出した。

同定の結果、貝類ではアサリを中心に、イガイ、ムラサキインコ、クチバガイ、タマキビ、ヘソアキクボガイなどが見られた。魚類ではタラ科が中心で、アイナメ属、カサゴ亜目、サケ科、ニシン科、ゲンゲ亜目、ヒラメ、マグロ属などが見られた。タラ科は耳石も多く出土しており、その形態からほとんどがマダラと考えられる。椎骨も体長1mはあろうかと思われるほど大きな試料があり、今回出土したタラ科の多くがマダラであった。哺乳類は非常に少なく、オットセイとラッコが確認された。鳥類はさらに少なく、ウミスズメ科が確認された。

北海道における同時期の貝塚として、洞爺湖町高砂貝塚などを挙げられるが、縄文晩期の貝塚は全国的に検出例が非常に少ない。今後、アサリの貝殻成長線分析や他時期、他遺跡との比較を通じて、貝塚形成の詳細を明らかにする予定である。

## 北海道アイヌの熊送り儀礼にみる近世以降の様式変化

Style Transition of the Bear Sending Ritual of Hokkaido Ainu after Early Modern Period

○佐藤孝雄・折井美陽（慶應義塾大学）・大坂 拓（北海道博物館）・  
加藤博文（北海道大学）

Takao SATO, Miharuru ORII, Taku OSAKA, Hirofumi KATO

熊送り儀礼は、アイヌ文化に学術的な関心が生じて以来、中心的な研究課題となってきた。わけでも飼熊儀礼に関しては、アイヌ文化の核心をなす儀礼として重視され(e.g.渡辺1972)、これを題材とした論考も枚挙に暇がない。各地における参与観察と聴取調査の結果を記す民族誌からは、細部に違いこそあるものの、20世紀前葉の時点でその様式や基本手順が北海道全域で共有されていたこと、狩猟で得た成獣・亜成獣の熊と飼育された仔熊との間に頭蓋骨の取り扱いに違いがなかったことを確認できる(煎本2010)。しかしながら、民族誌に知られる北海道アイヌの熊送り儀礼の様式・手順が一体いつ頃形作られ、また時代とともにどのように変化してきたかについては未だ詳細が掴めていない。

そこで、演者らは、この点を論じるべく、18世紀の熊送り儀礼に由来することが明確な斜里町以科北海岸遺跡で発掘されたヒグマ頭蓋骨群(佐藤2005: 加藤ほか2005・09・10・11)と、現在北海道博物館が収蔵する、主に20世紀以降、豊浦、千歳、豊富のヌサ(幣柵)に祀られていたと見られるヒグマ遺体の精査を試みた。本発表では、その成果を紹介し、道東地域におけるヌサの設置場所は近世と近代で異なっていた可能性があること、20世紀中葉以降、全道的に頭蓋骨の穿孔方式に変化が生じるようになったことを指摘する。

### 文献

煎本孝 2010『アイヌの熊祭り』東京: 雄山閣

加藤博文ほか 2005「斜里町以科北海岸遺跡測量調査第1次報告」『知床博物館研究報告』26: 61-70.

加藤博文ほか 2009「斜里町以科北海岸遺跡測量調査第2次報告」『知床博物館研究報告』30: 97-107.

加藤博文ほか 2010「斜里町以科北海岸遺跡測量調査第3次報告」『知床博物館研究報告』31: 53-62.

加藤博文ほか 2011「斜里町以科北海岸遺跡測量調査第4次報告」『知床博物館研究報告』32: 59-70.

佐藤孝雄 2005「斜里町以科北海岸遺跡のヒグマ頭骨」『知床博物館研究報告』26: 71-76.

渡辺仁 1972「アイヌ文化の成立--民族・歴史・考古諸学の合流点」『考古学雑誌』58(3): 47-64.

## 古墳時代の海浜集落にみる動物利用 —大阪府南部の小島東遺跡における動物遺存体の分析を通じて—

Study of animal use at coastal settlement in Kofun period

○山田望海(東海大学)・藤田道子(大阪府教育庁文化財調査事務所)・  
丸山真史(東海大学)

Nozomi YAMADA, Michiko FUJITA, Masashi MARUYAMA

近畿地方の古墳時代を代表する海浜集落には、和歌山県の西庄遺跡や大阪府の小島東遺跡などがあり、西庄遺跡は、王権膝下の手工業生産として活発な製塩がみられることで著名である。それに加え、膨大な魚貝類遺存体の出土により、活発な漁撈が行われた海辺の集落として、動物考古学的にも重要な遺跡として認識されている。さらに近年では、牛馬を保有していたことや、直弧文を施した鹿角製刀剣装具の製作などが評価され、海の生業に留まらない集落であることが指摘されている。この西庄遺跡の近隣には、複数の古墳時代の製塩遺跡が存在しているものの動物遺存体については未詳の点があったが、今回、大阪府南部に位置する小島東遺跡から出土している動物遺存体を分析する機会を得た。

小島東遺跡は、西庄遺跡に比べて小規模な海浜集落とされるが、大量の製塩土器に加えて、鍛冶に関連する遺物が出土しており、西庄遺跡と同様に王権の関与が指摘されている。小島東遺跡から出土した動物遺存体は調査中に視認できたものに限られるが、ハタ科、クロダイ属、マダイ、ニベ科、イルカ類などの海産物、カモ科、イヌ、イノシシ、シカ、ウマといった鳥獣類を同定することができた。本発表では、西庄遺跡における動物利用と対比できる資料群としての重要性に鑑みて、小島東遺跡における動物遺存体を紹介し、古墳時代の海浜集落における動物利用の一端を明らかにする。

## 炭素・窒素安定同位体分析による遺跡出土貝類の産地推定の試み

Attempt to estimate the locality of shellfish excavated from archaeological site  
using carbon and nitrogen isotope analysis

○石丸恵利子（広島大学）・大西雄二（総合地球環境学研究所）・  
由水千景（総合地球環境学研究所）・陀安一郎（総合地球環境学研究所）

Eriko ISHIMARU, Yuji ONISHI, Chikage YOSHIMIZU, Ichiro TAYASU

貝類は縄文時代以降食料資源として利用され、貝殻は貝輪などの装飾品や道具としても活用された。中世以降は多様な貝類が各地で広範囲に流通するようになる。貝類はその形では産地を明らかにすることはできないため、どの海域で採集されたものが遺跡に運ばれたのかを知ることはできない。それらの生息海域を特定することができれば、各時代の人の移動やものの流通圏や搬入ルートの実態を明らかにすることができる。貝類の産地解明の取り組みは、動物考古学において広く期待される研究課題の一つである。

これまで、炭素・窒素同位体分析による海産魚類の産地推定を進めてきたが、同一魚種においても瀬戸内海や日本海、太平洋などの海域によって骨コラーゲンの炭素・窒素同位体比が異なり、京都の平安京や西条盆地の市宿遺跡などから出土した海産魚類の産地を考察してきた。貝殻は炭酸カルシウムとコンキオリンというタンパク質で形成され、化石や遺跡出土の貝殻にもコンキオリンが残存していることが確かめられている（秋山1964）。海産魚類と比較して、生息場所の移動がほとんどない貝類には各生息海域の同位体比の特徴が記録されており、貝殻の炭素・窒素同位体比が産地を特定する有力な手掛かりになると考えられる。

本発表では、瀬戸内海、日本海、太平洋の3海域で採集された現生アサリの貝殻、および各海域沿岸部に位置する縄文時代3遺跡出土ハマグリの炭素・窒素同位体分析の結果を報告する。

## 北海道のサケ、マス類 (*Oncorhynchus* spp.) 遺存体を対象にした 古代DNA分析による人と魚の歴史生態学研究

○七座有香 (Simon Fraser University) ・

福井淳一 (北海道埋蔵文化財センター) ・

Hua Zhang (Simon Fraser University) ・

Thomas Royle (Norwegian University of Science and Technology/Simon Fraser University) ・

Dongya Yang (Simon Fraser University)

Yuka SHICHIZA, Junichi FUKUI, Hua ZHANG, Thomas ROYLE, Dongya YANG

サケ、マス類 (*Oncorhynchus* spp.) は、北海道のアイヌ民族の文化において極めて重要な役割を果たしてきた。しかし、1868年の同地域における植民地化以降、伝統的な漁業が禁止されたことでアイヌ民族は主要な食料源を失った。加えて、産業化された大規模漁業、人工孵化事業の導入、河川改修工事、外来種の移入など、様々な要因により深刻な生態系攪乱が引き起こされ、サケ・マス類に甚大な影響が及んだ。現在、アイヌ民族の中には、先住民族としての権利に基づきサケ漁業権の回復と適切な資源管理を目指す機運がある。

本研究では、北海道各地の9遺跡から出土した1万年以上の期間に渡る100点を超えるサケ・マス類遺存体に対し、古代DNA分析を実施した。歴史生態学の視点から考古・歴史・民俗学的資料の分析と合わせて古代DNA分析を用いることで、アイヌ民族とサケ・マス類の長期的な相互関係、漁労実態、植民地化以前、以降の環境変動と人為的影響の解明を試みる。

具体的には、古代DNAによりサケ・マス類遺存体の種同定と性別同定を行った。さらに、ミトコンドリアDNAおよび核DNAの一塩基多型(SNPs)の検討から、遺伝的多様性の歴史的変動を追跡し、環境変動と人為的影響を記録することを試みた。本発表では、これまでの分析結果を報告する。



## 古代DNAから明らかになった縄文時代のオオヤマネコ

○寺井洋平（総合研究大学院大学）・

松本悠貴（アニコム先進医療研究所株式会社）・

増田隆一（北海道大学）・佐藤孝雄（慶應義塾大学）

Yohei TERAJ, Yuki MATSUMOTO, Ryuichi MASUDA, Takao SATO

オオヤマネコ(*Lynx*属)は縄文時代まで日本列島に生息しており、その遺体は複数の遺跡から出土している。そのうちの一部の骨や歯は加工されており、縄文人とオオヤマネコとの関連を窺わせる。これまで尻労阿部洞窟出土の古代ミトコンドリアDNA配列が解析され、ユーラシア大陸のオオヤマネコとの関連が示されていた。本研究では、日本のオオヤマネコの起源を詳細に知るために古代ゲノムDNA解析を行った。これまで縄文時代の前期から晩期の瀬沢貝塚、市木貝塚、上黒岩岩陰遺跡、鳥浜貝塚、馬場遺跡、尻労安部洞窟出土のオオヤマネコの骨や歯からDNAの抽出を行った。このうち、オオヤマネコDNAの比率が比較的高かった馬場遺跡、尻労安部洞窟、上黒岩岩陰遺跡の由来の個体の全ゲノムシーケンスを行った(平均カバー率は3-4倍)。それらの配列とデータベース由来の配列により系統樹を構築すると、馬場遺跡由来の個体は*Lynx*属の最も基部で分岐し、また尻労安部洞窟由来の個体はユーラシア大陸の*Lynx*属の種の基部で分岐していた。つまり、馬場遺跡と尻労安部洞窟由来の個体は系統的に異なり、縄文時代の日本列島には異なる2つの系統の*Lynx*属の種が生息していたことが明らかになった。発表では上黒岩岩陰遺跡由来の個体の結果やユーラシア大陸の*Lynx*属と日本の個体の遺伝的な交流なども含めて報告する予定である。

研究発表E01  
7月7日（日）  
10:15～10:35

## 奈良文化財研究所所蔵のリュウキュウイノシシ下顎骨標本 （花井コレクション）

Specimens of modern Ryukyu wild boar mandible  
in the Nara National Research Institute for Cultural Properties: Hanai Collection

○山崎 健（奈良文化財研究所）・坂本 匠（京都大学大学院）・  
松崎哲也（奥松島縄文村歴史資料館）

Takeshi YAMAZAKI, Takumi SAKAMOTO, Tetsuya MATSUZAKI

奈良文化財研究所にはリュウキュウイノシシの下顎骨が約2,000点保管されており、広く活用されるように整理作業を進めている。本発表では、現段階までに明らかとなった標本の価値について発表する。

これらの標本群は、花井正光氏によって1970年代に西表島を中心として収集されたものである。リュウキュウイノシシの年齢査定研究として知られる花井（1976）の分析資料も含まれており、歯の萌出段階を連続的に観察することができる。さらに、採集日、採集場所、性別、計測値などの花井氏が記録したデータの原本も新たに提供していただき、標本と記録との照合作業を進めている。

沖縄復帰前後の質の高いデータを有したリュウキュウイノシシ標本群であり、遺跡出土資料の比較標本だけではなく、現生のリュウキュウイノシシ研究にも寄与することが期待できる。

### 文献

花井正光（1976）「リュウキュウイノシシ〈西表島〉」『追われる〔けもの〕たち—森林と獣害・保護の問題』築地書館

## 現生飼育イノシシの口腔病理に関する調査結果について

Results of research on oral pathology of native-bred wild boars

○山崎京美（國學院大學）・黒澤弥悦（在来家畜研究会）・

仲谷 淳（イノシシ総合研究所）・

清水良央（日本パーカライジング(株)/東北大学大学院）・

澤浦亮平（沖縄県立博物館・美術館）・遠藤秀紀（東京大学総合研究博物館）

Kyomi YAMAZAKI, Yaetsu KUROSAWA, Jun NAKATANI, Yoshinaka SHIMIZU,

Ryohei SAWAURA, Hideki ENDO

日本の動物考古学では出土するイノシシ類（ブタの可能性のある遺体も含む）に歯槽膿漏やエナメル質減形成がある場合、家畜かその可能性のある個体と認定されることが多い。しかし、その認定基準は分析者の経験知によるものが多く、客観的な基準の検討はされていない。

演者らは2013年から飼育イノシシ類の収集と、研究施設（東京農業大学学術情報課程・沖縄県東村立山と水の生活博物館など）や研究者が所有する飼育標本の骨計測と病理痕観察（歯石、歯槽吸収、エナメル質減形成、歯槽骨の形態変化）を開始した。現時点で調査した標本数は、飼育ニホンイノシシ34個体、同リュウキュウイノシシ16個体（飼育？含む）であり、他にリュウキュウイノシシとニホンイノシシ2亜種の交雑種1個体、飼育イノブタ（各亜種×ブタ）5個体である。飼育者からの聞き取りで年齢、飼育環境、飼料が把握できた個体もある。年齢は胎児～20歳までであるが、約10年以上の飼育個体は全臼歯が喪失することも判明した。また、歯石と唾液腺の位置関係を明らかにするため、ニホンイノシシ1頭を解剖し唾液腺開口部と対応歯の探査も行った。

本発表では飼育環境が明らかな標本を中心に全臼歯喪失までの口腔病理の過程を提示するとともに、歯石が多い野生個体と比較しながら「歯周病・エナメル質減形成＝家畜個体」とみる基準の検討を行う。そして、現代の飼育環境下の事例ではあるが、動物考古学への応用を考える。

研究発表E03  
7月7日(日)  
10:55～11:15

## 韓半島の湖南地域における鉄器時代のブタ

Domestic Pigs of the Honam Region in the Iron Age, Korea

○裴亨坤(京都大学大学院)

Hyounggon BAE

人類史において、ブタは狩猟活動から家畜飼育への生計経済の転換において重要な役割を果たした動物の一つであった。韓半島でもブタの飼育と利用がいつから始まったかについての関心が高まっている。かつて1970年代初頭、北韓では新石器時代および青銅器時代の遺跡から家畜化されたブタが報告されたが、最近の南韓の研究者によると、これらはむしろ野生のイノシシである可能性が高いと判断された。現在、南韓ではより明確な動物考古学的な証拠が確認されている。鉄器・三国時代にかけてブタの存在が認められており、ブタ飼育の開始は少なくとも青銅器時代後期の紀元前5世紀まで遡る可能性が指摘されている。このような根拠は、主に歯の大きさと安定同位体分析の結果に基づいている。それにもかかわらず、韓半島湖南地域における鉄器時代のブタの飼育はまだ明確でない部分が多い。これは、「馬韓社会」の家畜飼育文化を理解する上で重要であり、動物遺存体のデータの不足により、他の地域と比べてブタの飼育の理解が不十分であった。本発表では、このような問題を考慮し、鉄器時代の湖南地域の動物遺存体データを対象に、種組成、歯の大きさ、年齢組成、病理痕を分析して、鉄器時代のブタの飼育可能性を検討した。その結果、湖南地域でもブタの飼育が行われた可能性が高いという結論が導いた。これは、韓半島のブタの飼育文化に関する理解を拡大するのに役立つことが期待される。

## 韓国におけるニワトリの普及に関する基礎的研究 —キジ科およびニワトリの出土遺跡の分布と時期的変遷—

○李河暎（釜山大学校大学院）・丸山真史（東海大学）  
・江田真毅（北海道大学総合博物館）

Hakyeong LEE, Masashi MARUYAMA, Masaki EDA

日本では、唐古・鍵遺跡の弥生時代中期に遡るニワトリが最古であり、東アジア地域のなかでも古い事例として注目される。日本列島はセキショクヤケイの生息範囲外に位置するため、大陸や韓半島を経由して、日本に持ち込まれたと考えられる。最近の韓国のニワトリの研究では三韓時代のニワトリが確認されるが、新石器時代に遡る例について確証は得られていない（金子・中山1994、任・黄2004、배2023）。歴史的背景を辿れば、韓国では日本より早い段階にニワトリが普及していた可能性は十分にあるが、その実相は未だ明らかではない。本発表では、日本へのニワトリの伝播に関する研究の一環として、韓国の遺跡から出土したキジ科およびニワトリの分布と時期的変遷を示しながら、ニワトリの普及に関する基礎的研究の結果を報告する。

コロナ禍において、出土資料の実見が困難であったため、韓国の発掘調査報告書からキジ科とニワトリが出土している新石器時代から統一新羅時代の遺跡を抽出し、その遺跡の分布状況を時系列で整理した。新石器時代のニワトリは確認できず、三韓時代（紀元前2世紀～紀元後3世紀）にニワトリが出現し、三国時代（4世紀～7世紀）にかけてニワトリが増加していることが示唆された。一方で、俯瞰的にみれば、統一新羅時代までに極端なニワトリへの偏重はみられず、三韓・三国時代を通じて、急速にニワトリが普及したかどうかは問題点として残った。

### 文献

金子浩昌・中山清隆1994「韓国古代遺跡出土の動物遺体資料からみた文化史的研究」『青丘学術論集』

### 第5集

任鶴鐘・黄喆周2004「신석기시대 새의 위치」『영혼의 전달자』국립김해박물관

배형곤2023「철기·삼국시대 한반도 닭 (Gallus gallus domesticus)의 사육과 성격: 동물고고학적 접근」『湖南考古學報』第75輯

## 江戸時代のニワトリの大きさの多様性

Diversity in the size of chickens in the Edo period

○許開軒（北海道大学総合博物館）・丸山真史（東海大学人文学部）・  
江田真毅（北海道大学総合博物館）

Kai-hsuan HSU, Masashi MARUYAMA, Masaki EDA

文献史学の知見によると、小国、烏骨鶏、シャモ、チャボなどのニワトリ品種は江戸時代初期までに日本に持ち込まれた。考古学的知見では、江戸時代には様々な大きさのニワトリがいたことが知られているが、文献史学で提示された様々な品種がいかに日本の各地に普及したかは明確になっていない。

本研究では、近世江戸、長崎および大坂に所在する市谷本村町遺跡（新宿区）、四谷一丁目遺跡（新宿区）、出島和蘭商館跡（長崎市）、魚の町遺跡（長崎市）、大坂城下町跡OJ04-1地点（大阪市）におけるニワトリの大きさに着目し、時間的な変化と地域間の異同を明らかにすることを目的とした。

遺跡出土ニワトリ骨の計測値を各現生品種と比較した結果、ほとんどすべての遺跡において17世紀から19世紀にわたって現在のチャボに相当する小さい個体からシャモに相当する大きい個体が利用されたことが明らかになった。ニワトリの大きさの時期差と各世紀における遺跡間の違いの有無を検討した結果、ニワトリの大きさの時間的な変化は四谷一丁目遺跡と魚の町遺跡で確認された。また、17世紀の四谷一丁目遺跡と大坂城下町跡のニワトリは全体的に大型であったことがわかった。本研究の成果から、様々な大きさのニワトリが17世紀初頭にはすでに普及していたと考えられた。一方、江戸時代を通じて最も一般的に利用されたのは、「小国」を元に作り出された諸品種と同程度の大きさのニワトリであった可能性が高い。

## 弥生時代のニワトリの継代飼育を探る —カラカミ遺跡資料の分析から—

Exploring the possibility of successive breeding of chickens in the Yayoi period,  
based on zooarchaeological analyses of bones  
from the Karakami Site, Iki city, Nagasaki prefecture

○江田真毅・泉洋江（北海道大学総合博物館）・  
松見裕二（壱岐市教育委員会）

Masaki EDA, Hiroe IZUMI, Yuji MATSUMI

ニワトリは東南アジアに生息するセキショクヤケイを主たる祖先とする家禽である。日本列島には弥生中期までに持ち込まれたと考えられている。発表者らは形態の性的二形に着目した研究から、弥生時代のニワトリはその大部分がオスであり、日本列島ではほとんどの場所で継代飼育できなかった可能性を指摘してきた。長崎県壱岐市のカラカミ遺跡の平成23年度調査区では、弥生時代後期に埋没したと推定される大溝からキジ科の骨が18点出土した。そのうち足根中足骨と脛足根骨は形態からニワトリと同定されたものの、雛の骨4点を含む他の骨がニワトリに由来するかどうかは特定できなかった。一方、発表者らはコラーゲンタンパクの制限酵素断片を飛行時間型質量分析計で解析することで、日本産のキジ科野生鳥類とニワトリの骨を識別する方法を確立してきた。

そこで本研究では、カラカミ遺跡出土のキジ科資料を対象に、発表者らが確立したコラーゲンタンパクの質量分析による同定と性判定を実施した。その結果、肉眼同定でキジ科としていた資料のうち、2点をニワトリのものと同定できた。これらの2点の骨はいずれも成鳥のもので、また性的二形に基づいてオスと推定された。一方、分析に成功した雛の骨2点はいずれもキジまたはヤマドリのものと同定され、ニワトリのものではなかった。これらの結果から、カラカミ遺跡におけるニワトリの継代飼育は支持されなかった。

# ポスター発表抄録

7月6日（土）14:30～15:15



## 山形県遊佐町小山崎遺跡出土動物遺存体の空間的分析

Spatial analysis of faunal remains excavated from Koyamazaki site,  
Yuza Town, Yamagata Prefecture

○納屋内高史（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）

Takashi NAYAUCHI

小山崎遺跡は山形県北西部、遊佐町吹浦地区に所在する縄文時代後期を中心とする集落遺跡である。遺跡は秋田県との県境部に所在する鳥海山の南西麓から伸びる台地とその縁辺部の低湿地に立地し、月光川水系の河川が集まる河口部にも近い。

遺跡の存在は昭和初期から知られていたが、本格的な調査は1990年の圃場整備に伴う調査を端緒として、以後、山形県教育委員会や、山形県立博物館、遊佐町教育委員会などによって継続的に調査が行われた。その結果、縄文時代早期から晩期まで生活の痕跡が認められることが明らかになるとともに、縄文時代中期末～後期の居住域や水場遺構などが良好な状態で発見され、中期末～後期にかけての低湿地の周りに営まれた集落の姿が明らかとなった。このような調査成果を踏まえ、遺跡としての重要性が評価され令和元年度に国指定史跡に指定された。

本遺跡では居住域のある台地との境目付近の低湿地部を中心に多量の動物遺存体が出土している。本発表では、これまでの調査で出土した動物遺存体の空間的な出土傾向を再度整理するとともに、道具類や検出遺構の出土傾向も踏まえながら地点ごとの性格を再度検討する。

## 宮城県東松島市里浜貝塚で初確認されたウシサワラについて

First record of Chinese seerfish (*Scomberomorus sinensis*)  
from the final Jomon period at Satohama shell midden, Miyagi Prefecture, Japan

○松崎哲也（奥松島縄文村歴史資料館）

Tetsuya MATSUZAKI

ウシサワラ *Scomberomorus sinensis* はスズキ目サバ科サワラ属に属する大形のサワラ類であり、南日本から中国、東南アジア沿岸に分布し、日本近海では秋田県、千葉県以南に分布する。沿岸表層性で沿岸域や河口域に生息するが、時に川を遡上する。（井田編2004、中坊編2013）。

遺跡からの出土例では大阪の河内平野周辺に多いほか、愛知県、千葉県などで前上顎骨や歯骨、椎骨が報告されている。今回発見されたウシサワラは縄文時代後期末～晩期初頭の貝層から出土した尾椎1点で、椎体長41.08mm、椎体高38.83mm（※破損のため参考）、横径49.34mmを計る大型の個体である。近縁のサワラ属やマグロ属と形態的に類似するが、椎体側面の外側隔壁の幅がより太いこと、椎体腹面の下方中央溝が細長い溝状になるなどの特徴からウシサワラと同定した。

ウシサワラは現在東北地方太平洋沿岸域には分布しない暖海性魚種とされるため、縄文時代後期末～晩期の里浜貝塚で出土した背景については慎重な検討を要する。当時の分布域の北限が現在より北にあった、暖流により偶然来遊した、あるいは人為的に遠方から持ち込まれたなどの可能性があるが、ウシサワラの生態には不明な部分が多く、現時点では断定することが難しい。加えて、ウシサワラは遺跡からの出土例が稀なことや比較標本の少なさから形態的に類似するマグロ属と混同されてきた可能性もある。そこで、情報共有を兼ねて里浜貝塚の事例を紹介し、今後の類例増加や研究の進展に繋げたい。

## 北陸地域における初期貝塚の出現年代

Chronology of the initial Jomon shell midden in Hokuriku region

○畑山智史（船橋市飛ノ台史跡公園博物館）・

遠部 慎（中央大学人文科学研究所）

Satoshi HATAKEYAMAYA, Shin ONBE

日本列島における貝塚の形成は、貝塚密集地である関東では縄文時代早期前葉の撚糸文期、瀬戸内海沿岸では縄文時代早期中葉の押型文期にはじまる。その本州中央部の日本海側に位置する石川県や富山県、福井県の北陸3県における貝塚の形成は特異的であり、両地域よりも遅く、縄文時代早期末葉から前期初頭にはじまる。これまでの北陸地域における初期貝塚の研究は事例等が少なく、不明であったが、2004年に石川県三引遺跡、2013年に富山県上久津呂中屋遺跡、2019年に福井県桑野遺跡の発掘調査報告書が刊行されたことで、総合的に検討できる段階となった。また幸いなことに北陸地域の初期貝塚を理解するうえで重要な縄文時代早期末葉の貝塚である千葉県雷下遺跡も報告された。そこで本稿では、縄文時代早期末葉の貝塚について、年代値などを集成し、広域編年も加味し、アカホヤ火山灰の影響なども想定して、北陸地域における貝塚の形成初期について考えたい。

## 新潟県のウマ遺存体出土遺跡

Archaeological site of excavated horse remains in Niigata prefecture

○高尾将矢（新潟県文化課）

Masaya TAKAO

近年の発掘調査の増加に伴い県内のウマ遺存体の出土例も増加しているが個別事例の報告が中心であり、纏まった検討は行われていない。そこで本研究では、県内のウマ遺存体を集成し県内のウマ利用の実態に関して検討を行う。

## 近世下総ウマ集団の特徴

The characteristics of horse population from the Early Modern period Shimousa region

○植月 学・櫻庭陸央・山本満梨奈（帝京大学文化財研究所）・  
宮川博司（流山市立博物館）

Manabu UETSUKI, Rikuo SAKURABA, Marina YAMAMOTO, Hiroshi MIYAGAWA

千葉県流山市の大畔中ノ割遺跡は江戸川左岸の台地上に位置し、近世野間土手に近接する近世村落跡である。本遺跡では深いしし落とし状遺構が列状に検出されており、その多くで坑底からウマ遺体が出土した。その数は20個体以上を数える。遺存状況は全般に不良であるが、骨が残存する例では元来全身骨格が存在したと推定される例が多く、基本的には埋葬されたものと判断された。年齢構成をみると幼齢や老齢個体も含むが、主体は8歳前後の壮齢個体であった。体高は押しなべて小型で110cm台から120cm台前半までと推定された。ストレス・マーカーである中手・中足骨の骨間靱帯の骨化は確認されていない。これらのウマ遺体は遺跡の立地からみて幕府直営の小金牧のうちの上野牧の野馬に由来する可能性が論じられており、当時の牧関連文献でも斃馬を「犬落とし」に移送するとの本遺跡での出土状況に合致する記事も確認されている（萩原2021）。ウマ遺体の年齢構成からは天寿を全うしたのではなく、不慮の事故死などを含むと推測される。解体されず全身が埋められている点からも死馬利用を目的とした屠畜とは考えにくい。ストレス・マーカーが顕著でない点は使役された馬ではなく、牧での「半野生状態での放牧」（萩原・前掲）との状況に合致する。体高が全般に小型である点も、出荷されず牧に残された個体としては矛盾がない。報告では計測結果も踏まえて他の遺跡との比較をおこなう。

文献

萩原 恭一 2021「近世の牧とウマの埋葬」『研究連絡誌』85 千葉県教育振興財団文化財センター

## 尾張藩鷹場に所在する旧家から発見されたツルの骨 —東京都立川市中野家の事例—

Crane (Family Gruidae) bones discovered in a storage room of an old family home located in the Owari Domain's exclusive falconry hunting grounds :

Case study of the Nakano family in Tachikawa City, Tokyo

○阿部常樹（國學院大學学術資料センター）・高野宏峰・鳥越多工摩・  
山下祐香理（立川市産業文化スポーツ部市史編さん室）

Tsuneki ABE, Hiromine TAKANO, Takuma TORIGOE, Yukari YAMASHITA

現在、立川市史編さん室では、編さん事業の一環として地元の旧家である中野家より寄贈を受けた史料群（主に大正～昭和期）の調査を行っている。史料群は蔵の中に収められていたもので、そのなかから、包み紙に包まれたツル科の骨が2点みつけた。発見された部位は上腕骨左右1本ずつで、ほぼ欠損のない状態であった。サイズは全長275mmで、比較したタンチョウの現生標本（金子浩昌氏所蔵）より大きい。本資料の収蔵時期に関する情報は得られなかった。その上で、このようなツル科の骨が蔵に保管されていた背景について、発表者らは以下の考察を行った。①近代においては、明治25年（1892）の「狩猟規則」公布により、鶴を対象とする狩猟は禁じられた。そこで、まずは本資料が明治元年から25年までの間に捕獲された可能性を挙げておく。②立川地域を含むこの一帯は、近世においては尾張藩の鷹場であった。近世において、鶴の捕獲は、将軍をはじめごく限られた階層の人々にしか許されていなかった。そして、上腕骨は近世江戸遺跡でも食物残滓としてよく出土する部位である。以上の点に加えて本資料が蔵に大事に保存されていたことから、発表者らは、本資料が尾張藩と何らかの関係がある可能性を指摘した。具体的には、尾張藩より捕獲された鶴の一部が下賜され、骨を大事に蔵に保管していた可能性などが挙げられる。

## 近代・大学校地内より出土した大量の動物骨 －東京大学本郷構内の遺跡の事例－

Many bones of mammals excavated from a site on the campus of a modern university  
－A case of site on The Hongo Campus of The University of Tokyo－

阿部常樹（國學院大學学術資料センター）・○高橋怜土（八戸市博物館）・  
堀内秀樹（東京大学埋蔵文化財調査室）

Tsuneki ABE, Rito TAKAHASHI, Hideki HORIUCHI

東京大学本郷構内の遺跡医学部病院看護職員等宿舍5号棟地点の近代面の37基の土坑から推定で366羽のウサギ科の骨が出土した。いずれもほぼ全身の部位が偏りなく出土しており、解体せずそのまま廃棄されたものと推測される。また、食物残渣と考えられる動物遺体（特に魚貝類）も含まれていない。ウサギ科以外の哺乳類も出土しているものの、1基の遺構で9割はウサギ科が占めている。なお、「モルモット」と推測されるものも含まれている。下顎骨の形状などからノウサギではなくカイウサギ（アナウサギ）と推測された。これらは、大学という性格や上記の出土状況から、解剖実習や実験に用いられた可能性が想起された。一方で、この大量のカイウサギが廃棄されていた背景に、明治5年頃に東京府下でアナウサギが愛玩用に飼育されたことが流行していたことに着眼した。流行は過熱し、その影響で値が高騰したことが知られている。特に東京大学本郷キャンパスのある本郷と本郷に隣接する小石川、神田は売買世話人及び飼育者が多かった。あまりに加熱する流行に東京府は、明治6年に「兎税」を導入している。その税額はあまりに高かったため、その後、さまざまな形でウサギの処分が始まり、その一環として、東京大学に持ち込まれ、それらを解剖実習や実験に用いられた可能性を仮説として提示した。今回、近代における飼育動物の扱われ方、また実験動物の実態を考える一事例として紹介したい。

## 三浦市間口A洞窟の脊椎動物遺体

Vertebrate remains excavated from the Makuchi A Cave in Miura city

○宇根宏紀（慶應義塾大学大学院文学研究科）

Hiroki UNE

間口A 洞窟は神奈川県三浦市南下浦町松輪字間口に東向きに開口する海蝕洞窟である。1949・50 年に赤星直忠率いる横須賀考古学会、1971-73 年に神奈川県立博物館によって発掘調査が行われ、国内初例となる弥生時代後期のト骨、古墳時代後期のト甲が発見されたことでも名高い(赤星1953, 神澤1973)。当洞窟の出土動物遺体は、現在、横須賀市自然・人文博物館、赤星直忠博士文化財資料館、国立歴史民俗博物館、神奈川県立歴史博物館に保管されており、発表者は上記4館が所蔵する全ての脊椎動物遺体を同定・観察した。その結果、洞窟利用者の活動について以下の特徴が明らかとなった。

- (1) 出土種の生態に鑑みると、当洞窟を利用した弥生時代人の漁場は湾口部及び沿岸部の岩礁帯に加え沖合にも及んでいたとみられる。
- (2) 弥生時代における当洞窟の利用季節はほぼ周年に亘っていた。
- (3) 洞窟利用者は、主に骨角器製作のためにシカの遺体を洞内に持ち込んでいた可能性が高い。

もっとも、上記の諸特徴が三浦半島沿岸に所在するすべての海蝕洞窟に一様に認められるものであるか否かは検討の余地がある。従来、海蝕洞窟の生業は一括りにして語られてきたが、半島に所在する洞窟群に見られる出土動物遺体の特徴の異同は、今後、それぞれの立地特性や共伴する他の考古資料の内容も踏まえて、考察する必要がある。

### 文献

赤星直忠 1953「海蝕洞窟 三浦半島に於ける弥生式遺跡」『神奈川県文化財調査報告書』20:52-143.

神奈川県教育委員会

神澤勇一 1973「間口洞窟遺跡 本文編」『神奈川県立博物館発掘調査報告書』7: 1-35.



## 3D写真計測による骨角器の検討 —縄文時代後期における角座骨付き鹿角の利用について—

Examination of bone tools using 3D photographic measurements:

The use of deer antler with cranium in the late Jomon period

○風間智裕(茅ヶ崎市教育委員会)・畑山智史(船橋市飛ノ台史跡公園博物館)・

福井淳一((公財)北海道埋蔵文化財センター)・

宮田佳樹(東京大学総合研究博物館)

Tomohiro KAZAMA, Satoshi HATAKEYAMA, Junichi FUKUI, Yoshiki MIYATA

近年、3D写真計測(フォトグラメトリ)を利用した遺物の展開図や実測図が増加している。本発表では東京都北区西ヶ原貝塚より出土した石棒型骨角器を中心に角座骨付き鹿角の利用についての検討を行った。西ヶ原貝塚の対象資料についてはシカの角の「袋角」の状態であり、加工品ではないという意見もある。そのため、観察と素材同定を担当した西本豊弘は詳細な加工痕跡の部分説明や同定根拠から加工品と認定した。

そこで、発表者は3D写真計測にて作成した3D及び作成した図を使用することで、客観的な情報の提示や共有が可能ではないかと考えた。また、形状や加工痕跡を他の遺跡資料の3Dとも比較することができるため、類例の検討も行うことが期待できる。

本発表は骨角器の3Dがどのくらい有効であるかを提示し、新たな問題や課題を提起する。

文献

(財)東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター 2011『西ヶ原貝塚』東京都埋蔵文化財センター調査報告262

## 破碎からみた縄文後期関東地方の動物解体技術

Butchery techniques in Jomon Period Kanto region based on bone fractures

○櫻庭陸央・植月 学（帝京大学文化財研究所）

Rikuo SAKURABA, Manabu UETSUKI

千葉県曾谷貝塚（後期初頭～後葉）・余山貝塚（縄文時代後期中葉～後葉）より出土したニホンジカ・イノシシ骨の破碎（fracture）の分析により、動物解体技術の差異について考察した。両種の頭部・四肢部の破碎はその形状からA類（螺旋状）、B類（階段状）、C類（先端が尖る）、D類（鋸歯状）、E類（末端部が平坦）、F類（平坦面）の6種類に分類された。先行研究を参考に、A類は生骨、B～F類は乾燥した状態での破碎によって生成されたと推定された。

また、観察数が多かったニホンジカ上腕骨遠位、橈骨遠位、大腿骨遠位、脛骨遠位の破碎位置と分類組成を両貝塚で比較した。基本的にA類が主体となる曾谷貝塚に対し、余山貝塚では橈骨遠位・脛骨遠位でA類が主体であったが、上腕骨遠位・大腿骨遠位は他分類の比率が比較的高かった。曾谷貝塚では基本的に生骨状態での破碎、余山貝塚では橈骨遠位・脛骨遠位が生骨、上腕骨遠位・大腿骨遠位では生骨および乾燥状態での破碎がうかがわれた。骨髓抽出の効率化を目的とした加熱による乾燥状態での破碎の可能性、そして余山貝塚では中手・中足骨を素材とした骨角器が多量に出土している点をふまえ、本貝塚では食料資源（骨髓）獲得を目的とした加熱による乾燥状態での四肢上部の破碎、非食料資源（骨角器素材）獲得を目的とした生骨状態における四肢下部の破碎という、各部位で異なった骨の状態での破碎がおこなわれていた可能性が考えられた。

## 愛知県朝日貝殻山貝塚より1954年の調査で出土した 弥生時代前期の動物遺存体

Faunal remains of the Early Yayoi period  
from the Asahi Kaigarayama shell midden, Aichi, in 1954

○廣瀬允人

Masato HIROSE

愛知県清須市に所在する朝日遺跡は、弥生時代の大規模環濠集落跡として知られ、その中の貝殻山貝塚とその周辺は集落成立期に当たる弥生前期頃の遺構として注目されてきた。これまでの調査により、貝塚が点在する貝殻山貝塚地点では南北250m、東西150mほどの楕円形の前期の環濠集落が想定されている。しかし、環濠内の集落の実態について窺い知る情報は少ない。貝殻山貝塚は幾度か個人や大学により調査が行われているが、調査年が古く、出土遺物についての詳細な報告は限られている。1950年に愛知学芸大学、1954年に名古屋大学によって発掘調査が行われた記録があるものの、動物遺存体については特に詳細が不明であった。この研究では、名古屋大学による1954年の貝殻山貝塚における発掘調査で出土した動物遺存体について、動物種を同定し、種構成を求めた。貝類は破片も含め55点で、脊椎動物の標本数244点と比べて少なく、目立つものだけが採集されたものと考えられた。脊椎動物は、哺乳類、鳥類、魚類で構成され、ニホンジカが同定標本数116点の内78.5%を占めた。次いでイノシシが15.5%と多いものの、ニホンジカと比べて大差がある。ニホンジカは骨端癒合状態がわかる42点の内、10点（23.8%）が未癒合であり、年齢構成から半数近くが4歳未満の若い個体である可能性が示された。イノシシが少なく、若いシカが多いという傾向は朝日遺跡の弥生中期の傾向とは異なり、集落の大規模化を考える上で重要である。

## 琵琶湖に運ばれてきた海産物—滋賀県塩津港遺跡—

Fish remains brought into Lake Biwa:  
the Shiotsuko site, Nagahama-city, Shiga, Japan

○佐藤巧庸(慶應義塾大学大学院文学研究科/山形県立博物館)・  
重田勉(滋賀県文化財保護協会)・横田洋三(元滋賀県文化財保護協会)

Koyo SATO, Tsutomu SHIGETA, Yozo YOKOTA

塩津港遺跡は滋賀県長浜市西浅井町、琵琶湖の最北端に位置する11～12世紀の神社と港を中心とした遺跡である。発掘調査を通じて、港施設は琵琶湖の埋め立てを繰り返して築かれたものであることが明らかとなり、その造成土の中から多様な遺物が大量に出土した。本遺跡の発掘報告書刊行に向けて、発表者らが動物遺体について基礎的整理作業を行った結果、中世における海産資源流通の一端が明らかとなった。

出土動物遺体総数384点のうち、280点の種名と部位が同定可能であった。その内訳は、魚類が17点、爬虫類が55点、鳥類が28点、哺乳類が179点である。特筆すべき点は、コイ科、ナマズ属といった琵琶湖生息種に加えて、マグロ属、ブリ属、タイ科、マダイ亜科、ボラ科といった魚類遺体が出土したことである。隣接する神社遺構から出土した起請文木札には、北陸地方から集積された荷物である「魚」に関する誓文が記されている。さらに、北陸の大量の鮭が敦賀から塩津を経て、京都や畿内へ輸送されていたことは文献史研究から指摘されており、「魚」は「鮭」と想定されていた。

しかし、出土した魚類遺体は、5種の鹹水あるいは汽水産の異なる魚種であり、サケ以外の魚種も中世的湾港都市である本遺跡に持ち込まれていたことが示唆された。

滋賀県内における動物遺体の出土は極めて稀であり、本資料は琵琶湖水運を通じた北陸から京への海産資源の物流を物語る貴重な資料となりえる。

## 動物頭骨を用いた民族誌資料 —南山大学人類学博物館所蔵西江雅之コレクションより—

Ethnographic materials using animal skulls :

Masayuki Nishie collectios at Nanzan university museum of Anthropology

○高橋佳子（南山大学人類学博物館）

Yoshiko TAKAHASHI

南山大学人類学博物館（愛知県名古屋市）には西江雅之氏（1937年 - 2015年 東京外国語大学助教授・早稲田大学文学部教授）の所蔵資料が寄贈されている。西江氏は言語学者であり、文化人類学者である（アフリカ諸語・文化研究が専門でスワヒリ語辞典を編纂された）。長兄 西江寛氏と弟子の加原奈穂子氏（早稲田大学）の尽力で収蔵されている。

「晩年を過ごされた三鷹の「蝦蟇屋敷」には、まるで個人美術館の様相を呈する全世界から集められた数々の民具・工芸品・美術品とともに本が氾濫していたが、書籍はあくまでも分類され部屋ごとに収まる場所と棚をもち、見失われることがなかった。」

との事で書籍は明治大学図書館に搬入されている（管2017）。

人類学博物館に寄贈された中には動物の頭骨を用いた海外の資料が見受けられる。例えば、首飾り（ニューギニア）、馬の頭骨の仮面（インドネシア ティモール諸島）、壁飾り（単数の動物の骨を用いた物）、人形の様な物（骨壁飾りで登録・複数動物骨を用いた可能性あり）等である。

動物骨や人骨について畏怖する民族もあるが、骨を身につけ、飾る民族もあると考えられる。

今回、西江雅之氏寄贈資料の動物頭骨を用いた資料を写真や実測図、計測、部位の検討・民族誌類例の検討を行い、資料紹介する。

### 参考文献

管 啓次郎2017『「西江文庫」にむかって』明治大学図書館 明治大学学術成果リポジトリ  
西江雅之（企画 管 啓次郎・港 千尋・加原奈穂子）2018『顔！』左右社

## 次世代シーケンサー解析によるマルタニシの遺伝子情報から ヒトの移住を読む

○松本建速（東海大学）

Takehaya MATSUMOTO

マルタニシ *Cipangopaludina chinensis laeta* は水田に生息する淡水性の巻貝である。日本列島の場合、同種は縄文時代にはほとんど出土せず、弥生時代以降の遺跡から多数発見されるようになることから、水稻耕作の導入に伴って移入されたと推測されている（黒住2001）。ミトコンドリアDNAによる解析でも、朝鮮半島産と日本列島産とは遺伝的に近く（Hirano et al.2015）、マルタニシは弥生時代以降に朝鮮半島から移入された可能性が高い。

それが正しいとすると、マルタニシはヒトの移住・移動の指標となる生物だと理解できる。そして北海道のマルタニシは、当該地域に水稻耕作が根付いた近代以降に本州島から移入されたという仮説が生まれる。そこで今回、北海道（後志郡蘭越町、桧山郡厚沢部町、亀田郡七飯町）、本州東部（秋田県八郎潟町、新潟県長岡市、宮城県栗原市、神奈川県平塚市）、本州西部（滋賀県甲賀市）、四国（愛媛県西予市、同県鬼北町）のマルタニシ96点を試料として次世代シーケンサー解析を実施し、全遺伝子情報をもとにマルタニシの移動を考察した。

Structure解析を実施したところ、北海道蘭越町産は本州東北部日本海側の秋田県産や新潟県産にかなり近いこと、北海道の他の2箇所すなわち厚沢部町産と七飯町大沼産は、今回解析した本州産のものに遺伝子型が似たものはないが、七飯町大沼産は秋田県産といくらか交雑があったことが読み取れた。

本報告は2022～2024年度科学研究費（基盤研究C）「次世代シーケンサー解析によるマルタニシの遺伝子情報からヒトの移住を読む」（代表・松本建速）の中間報告である。

## Origin and Spread of *Bombyx mori* domestication in East Asia

Dong Hoon SHIN (Seoul National University),

Yangsue YI (Cheongju National Museum),

Jong Ha HONG, Ala GO (Kyung Hee University)

The breeding of insects such as silkworms or honeybees was an important event in human history. In particular, since silkworms contributed greatly to improving human clothing, identifying the origin and development of silkworm domestication is very crucial not only for natural history, but also in terms of mankind history. On the origin of sericulture, researchers generally agree that silkworm breeding first began in China, but there are many disagreements about the specific development pattern. Although useful archaeological discoveries have been reported since the late 20th century, the history of silkworm breeding in East Asia as a whole has not yet been fully elucidated. In this presentation, we would like to review the recent updates of archaeological, historical, and genetic studies in order to understand the latest trends on the origin and spread of silkworm domestication in East Asia and to see how the tradition of sericulture from China affected neighboring countries such as Korea and Japan. This report is conducted by the education and research support of Seoul National University Hospital (2024).

## 『動物考古学』 原稿募集のお知らせ

『動物考古学』第42号（2025年2月刊行予定）の原稿を募集します。投稿は随時受け付けております。第42号には2025年11月末までに受理した原稿を掲載しますので、早めの投稿をお奨めします。学会誌の充実のため、積極的な投稿をお願いします。

### <原稿の種類>

**原著論文** : 未発表の新しい資料・知見をまとめたもので結論の明確なもの

**研究ノート** : 論文に準ずるもので、研究の中間報告や速報性を要するもの

**総説** : 特定の主題について研究史・これまでの研究成果・展望などを総覧したもの

**調査報告** : 考古学、民俗学、民族学、生物学などの調査の成果報告

**資料紹介** : 重要資料の紹介

**図譜** : 研究に有用な原図などの紹介

**その他** : 書評、関連学会の報告や紹介、国際情勢の動向など

執筆要領と投稿規定は動物考古学会 HP (<http://www.zoearch.net>) に掲載されていますので、ご覧ください。

### <投稿先>

〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 北海道大学総合博物館 江田研究室

TEL : 011-706-4712

E-mail : edamsk (at) museum.hokudai.ac.jp

※ (at) を@に変えてください。

『動物考古学』編集委員会

委員長：江田真毅

委員：小野林太郎・菊地大樹・澤田純明・高橋健・建石徹・津村宏臣・

浪形早季子・丸山真史